

漢法苞徳塾資料	No. 267
区分	治療論・補瀉
タイトル	補瀉の問題
著者	八木素萌
作成日	1995.07.28

◎補瀉選択の基準となる論は？

『素問』通評虚実論第 28 は「邪気盛則実・精気奪則虚」とし『靈枢』根結第 5 では「形気之逆順奈何」と設問して「形気不足・病気有余・是邪勝也・急瀉之」「形気有余・病気不足・急補之」「形気有余・病気有余・此陰陽俱有余也・急瀉其邪・調其虚実」「形気不足・病気不足・此陰陽気俱不足也・不可刺之」等と述べている。元・汪機『鍼灸問対』の「卷上・或曰：形気、病気、何以別之」は臨床に運用しやすいよう注解している。「…夫形気者・気謂口鼻中喘息也・形謂皮肉筋骨血脈也…」として補瀉論に論ずる場合の「気」と言うのは、「心肺機能」のことに他ならず、「形」と言うのは「皮膚がシッカリしているかどうか、筋骨が立派であるのか、脆弱なのか、体表で観察できる血管の状態が色調や太さや気配などが良好であるのか、力弱く細く嬌妖に色調・気配が好ましくないのか、を認められるかどうか、ということ」に他ならない、こう言う論である。臨床的に極めて明快なものである。

このような記述を『難経』48 難の中の「病の虚実」に関する記述と重ねあわせて勘案し、これらに 81 難の「補瀉の決定は脈によらず病自体の虚実によるべきである」と言う指示と、私が第 15 回日本経絡学会学術大会に報告した『難経の補瀉論』を重ね合わせると、臨床的な虚実判断論と補瀉配穴論および手技選択論が立体的に統合される。これが私の臨床的指針となっている論である。

◎臨床的な補瀉

1. 配穴による補瀉

これには直裁なもの・迂回的または間接的なものがある。

2. 手技の補瀉

『靈枢』九鍼十二原第 1 にある補・瀉・泄・除の区分は、手技を大分類する拠り所にすることが良いと思われる。例えば「現代 17 手技」には補的なもの瀉的なもの両方に跨がるもの等がある。また手技論の出発とも言える『素問』『靈枢』『難経』などの実技を記述する部分は絶えず研究されなければならない。手技の種類も程度もほとんど無限であると言えるのでは無いだろうか？

3. 用具別の補瀉

用具別にそれぞれの手技があり、補瀉がある。専ら瀉的なもの・双方に運用できるもの・等がある。

留意しておかなければならない事は、『難経』48難の「三虚三実」における「虚実」は、同じ語句を用いているのに、それぞれの意味している尺度が別々であるから、これらを「意義が等しい」と解してはならない事と、これらの判断は「病の虚実」の判断とも次元を異にしている点とが、確実に意識され認識されていなければ、補瀉選択が大きく謬るものである。このことと「用具別の補瀉」の「病に与える作用における“病に対する補瀉”」とが異次元の問題であること。

この点の重要性である。

これは、多層性の意味合いを正確に把握しておくべき点に、注意が促されている問題である。

「補瀉の考え方の多層性」「用具の効能の多層性」「病の補瀉に見られる補瀉の多面性と多層性」これらの相関において、用具の選択の問題と運用手技選定の問題が存在している。非常に複雑困難な選択問題である。これは、日々の臨床において実践問題として絶えず迫られている課題である。

4. 補瀉の臨床的運用は

上の3要素を統合して行なわれ、『難経』80難の「…左手見気来至乃内鍼・鍼入見気尽乃出鍼…」を重んじ、病邪の排除や減衰に注意する。精気の話は「呼吸」「汗」「心拍」「眼光」「ノドの違和感」「動作」に細心に観察し過剰治療を避ける。

5. 臨床的に施術において見られる効果から補瀉を〈結果としての〉認識するには

『素問』通評虚実論第28の「邪気盛則実・精気奪則虚」と『難経』37難の「…夫気之所行也・如水之流・不得息也…其不覆溢・人氣内温于臟腑・外濡于腠理」の運用で認識する。「気血の交流」「陰陽の交通」「経気の流通」が『治療の眼目』であるから、この点を具体的に診ようとしている。

6. 臨床に運用している鍼具など

毫鍼を主に運用したが、必要と判断した場合には、員鍼や太鍼・長鍼その他は勿論、打鍼や燔鍼なども運用して治療した。毫鍼と小野流円鍔鍼は、金銀をセットに運用する場合もあった。昨年の初め頃に1983年以来試作を重ねてきた「汎用金セット太鍼」が最終的に完成し、その運用手技論も完成してからは、臨床の大部分はこの鍼を用いている。

7. 配経・配穴による補瀉

順逆の補瀉は4通りある。母子関係・相剋関係・流注に関連するもの・穴の格別の組み合わせや独特の性質を利用するもの・剛柔関係・運氣関係・五問十変の関係・その他実に多くの経脈の性質や穴性を運用している例が記録されているので、これらに注意を払って単純なパターン化に陥らないように戒心しながら治療に望んでいる。

◎配穴の補瀉

◇『難経』の配穴論には、

1. 『69難』と『79難』に述べられている「迎随の補瀉」
2. 『70難』『72難』『74難』の記述にある「正気の所在」「病因の所在」「季節に応じる所」を取る原理
3. 『75難』『81難』の「金木こもごも相いに平にす」と例示し『64難』『67難』に言うような「剛柔の運用」
- 4 = 『73難』『77難』に見える代行運用や予防的措置としての運用
- 5 = 『62難』の原穴論・『67難』の腧募穴論・『68難』の五腧穴・五行穴の主治症論・『44難』の七衝門論・『45難』の「八会穴」論・『31難』に見える「三焦の主治穴論」などの格別の穴性を把握運用している系譜のもの
- 6 = 『28難』『29難』の奇経の治療論

などのように、6～7の異なった系譜が見られる。

◎手技の補瀉

原理的な理解が重要と思うが、その点『素問』鍼解第54の

「…虚ヲ刺ストキハ之ヲ実セシムトハ鍼下熱スルナリ、気実ツスレバ乃ワチ熱ツスルナリ。満ナレバ之ヲ泄ラストハ鍼下寒ユルナリ、気虚スレバ乃ワチ寒ユルナリ。菀陳ナレバ之ヲ除クトハ、悪血ヲ出ダスナリ。邪勝テバ之ヲ虚セシムル者ハ出鍼ニ按ズルコトナカレ。徐ニシテ疾キトキハ実ツストハ、徐ヤカニ出鍼シテ疾ヤカニ之ヲ按ジ、疾ヤカニシテ徐ヤカナレバ虚ストハ、疾ヤカニ出鍼シテ徐ヤカニ之ヲ按ズ。…」

としている記述に、補瀉手技の原理的なものがあると思われる。

『難経』の場合を見ると「……………」〈 難〉・「……」〈 難〉・「……」〈 難〉・「……」〈 難〉・「……」〈 難〉・「……」〈 難〉・「……」〈 難〉・

『靈枢』官鍼第7の〈十二刺〉・『靈枢』邪氣藏府病形の〈六変に应ずる刺法〉・『靈枢』官鍼第7の〈五臓に应ずる刺法〉〈九変に应ずる刺法〉・『靈枢』小鍼解第3、『素問』調經論第62、『靈枢』九鍼十二原第1、『靈枢』寿夭剛柔第6、『靈枢』刺節真邪第75〈五節刺〉などのほか、基本的な病証として記述されている所にはそれに応じた刺法が記述されている。

1. 三変刺…『靈枢』寿夭剛柔第6

「…刺營者出血・刺衛者出氣・刺寒痺者内熱…」

「…營之生病也・寒熱少氣・血上下行…」

「…衛之生病也・氣痛時來時去・怫氣責響・風寒客于腸胃之中…」

「…寒痺之為病也・留而不去・時痛而皮不仁…」

「…刺寒痺内熱奈何・伯高答曰；刺布衣者・以火焯之。刺大人者・以葉熨之…葉熨奈何…以熨寒痺所刺之処・令熱入至于病所・寒復灸中以熨之・三十遍而止・汗出以巾拭身・亦三十遍止・起步内中・無見風・每刺必熨・如此病已矣・此所謂内熱也」

★～～

「…久痺不去身者・視其血絡・尽出其血…」

註…『靈枢』官鍼第7にも「三刺」がある。

2. 『靈枢』官鍼第7〈九変に应ずる刺法〉

「…凡刺有九・以应九変。一曰輪刺：輪刺者・刺諸經榮輸藏腑也。二曰遠道刺：遠道刺者・病在上・取之下・刺府腑也。三曰經刺：經刺者・刺大經之結絡經分也。四曰絡刺：絡刺者・刺小絡之血脈也。五曰分刺：分刺者・刺分肉之間也。六曰大瀉刺：大瀉刺者・刺大膿以鉞鍼也。七曰毛刺：毛刺者・刺浮痺皮膚也。八曰巨刺：巨刺者・左取右・右取左。九曰焯刺：焯刺者・刺燔鍼則取痺也。…」

3. 『靈枢』官鍼第7〈五臓に应ずる刺法〉

「…凡刺有五・以应五臓。一曰半刺・半刺者・浅内而疾発鍼・無鍼傷肉・如拔毛状・以取皮氣・此肺之应也。二曰豹文刺・豹文刺者・左右前後鍼之・中脈為故・以取經絡之血者・此心之应也。三曰関刺・関刺者・直刺左右・尽筋上・以取筋痺・慎無出血・此肝之应也・或曰淵刺・一曰豈刺。四曰合谷刺・合谷刺者・左右鷄足・鍼于分肉之間・以取肌痺・此脾之应也。五曰輪刺・輪刺者・直入直出・深内之至骨・以取骨痺・此腎之应也。」

★～～

「…病在皮膚無常処者・取以鑱鍼于病所・膚白勿取。病在分肉間・取以員鍼于病所。病在經絡痠痺者・取以鋒鍼・病在脈・氣少当補之者・取以鍤鍼于井榮分輸。病為大膿者・取以鉞鍼。病痺氣暴発者・取以員利鍼。病痺氣痛而不去者・取以毫鍼。病在中者・取以長鍼・病水腫不能通關節者・取以大鍼。病在五臓固居者・取以鋒鍼・瀉于井榮分輸・取以四時。…」

4. 『靈枢』官鍼第7〈十二經に應ずる刺法〉

「…凡刺有十二節・以應十二經。一曰偶刺・偶刺者・以手直心若背・直痛所・一刺前・一刺後・以治心痺・刺此者傍鍼之也。二曰報刺・報刺者・刺痛無常處也・上下行者・直内無拔鍼・以左手隨病所按之・乃出鍼復刺之也。三曰恢刺・恢刺者・直刺傍之・舉之前後・恢筋急・以治筋痺也。四曰齊刺・齊刺者・直入一・傍入二・以治寒氣小深者。或曰三刺・三刺者・治痺氣小深者也。五曰揚刺・揚刺者・正内一・傍内四・而浮之・以治寒氣之博大者也。六曰直鍼刺・直鍼刺者・引皮乃刺之・以治寒氣之淺者也。七曰輪刺・輪刺者・直入直出・稀發鍼而深之・以治氣盛而熱者也。八曰短刺・短刺者・刺骨痺・稍搖而深之・致鍼骨所・以上下摩骨也。九曰浮刺・浮刺者・傍入而浮之・以治肌急而寒者也。十曰陰刺・陰刺者左右率刺之・以治寒厥・中寒厥・足踝後少陰也。十一曰傍鍼刺・傍鍼刺者・直刺傍刺各一・以治留痺久居者也。十二曰贊刺・贊刺者・直入直出・數發鍼而淺之出血・是謂治癰腫也。…」

未完